

最近ハゲてきました。ここ数ヶ月で見える間に髪が抜け、おデコから頭頂部にかけてスカスカでかなりヤバイ状態になっています。

風説によるとコロナ感染の後遺症に抜け毛があるらしく、もしやすると知らない間に感染して症状がでないまま後遺症だけ残ったのだろうか？などと考えもしましたが定かではありません。気休め程度にウエルネスで『カロヤンプログレEX』なる医薬品の発毛剤を買って来てせっせとフリカケてはいますが、はてさてどうなることでしょうか。

元々子供の頃からいわゆるギリの部分が大きく肌が透けて見えていたようで、中学生の時に背の高い同級生に上から覗きこまれて「こいつハゲてる！」と大声で言われたときは流石に驚愕したものです。

それ以来自分の頭髮はそんなものだと思いつれほど気にはしていなかったのですが、今更ながら現実を目を向けるとこの大惨事です。もしこれが十年前のことでしたらかなり深刻に悩んだかもしれません。先だって歳六十二の誕生日を迎えた身としては、老化現象だと観念したほうが楽かもしれません。

どうも還暦を過ぎてから心身ともに急に劣化して

しまったような気がします。老いてもなお盛んな方もいらつしやいますが、私の場合特に気力の落ち込みが著しくて何事にもやる気が起きない、集中力が続かない、兎に角全部どうでもいい。風に吹かれて流されて、惰性でゆらゆら生きているような感覚です。

そう言えば最近、もう一つ如実な老化現象が起きました。平日の夕方にBSで再放送している『水戸黄門』をたまたま見ていると、これが存外に面白くて病みつきになり、毎日見るのが脅迫的な日課になってしまったのです。

私は大昔からウルトラマンや仮面ライダーが大好きで大人になってからも見続けていたのですが、水戸黄門は年寄りのためのヒーロー物であることを改めて実感しました。助さん格さんの超人的な大立ち回りは正にサイボーグですし、由美かおる姉さんの華麗な衣装とアクションは変身忍者としか言いようがありません。

願わくは死ぬまでに水戸黄門の新作が見られたら望外の幸せです。ちなみに私が熱望する配役は、御老公に吉田拓郎、助格にキンキのお二人。もちろん光一くんが助さんで、剛くんが格さんです。尤も、夢のまた夢の夢のお話ですが。



專業ババ奮闘記(その2) 123

## 木幡智恵美

冬(4)

二日の朝、長男と義母の墓参りをした後、駅へ向かった。二泊三日なんて、あつという間だ。今のところ、コロナ感染者は減っているが、いつまた波が襲ってくるか分からない。今度長男に会えるのはいつになるだろう。

三が日が明け、娘が出勤になると、寛大の子守に玉湯へ行ったり、家に連れてきたり。雪がないので、外で縄跳びの練習をし、ボール蹴りやバドミントンをする。家の中ではミノ倒しや風船バレー、お絵かきにおはじ飛ばし。この日、寛大は新しい遊びを教えてくれた。宝探しならぬ、百グラムの物探しだ。秤を置き、百グラム見当の物を探して持って来て乗せ、百グラムに近い物を持ってきた者が勝ちというゲームだ。卵二個分くらいかなと思つてまずはトランプを持って行くと、重すぎた。寛大は棚にある物を二つ選んで量つたら軽すぎた。なかなか難しい。そのうち、寛大は二個乗せてびったり百グラムにした。台所で秤を使う頻度は私の方が圧倒的に多いというのに、寛大に負けてしまった。

我が家に来た時は、近くの公園に行つてキャッチボールをしたり、床几山まで散歩をしたり。帰つて昼食準備をするあいだ、「ジジの部屋で遊んで」と言うと、「ジジは相手してくれんもん」と言うので、一緒に雑煮を作った。陽が射す仏間で昼食。仏間と義母の部屋は南向きで、冬でも暖かい。義母は元気だった頃、陽光を浴びながら炬居でよく眠りをしていた。

三学期が始まり、給食も開始となり、息子も早い出勤となった。正月明けから徐々にコロナ感染者が増えてきている。帰省や初詣など、人の動きが活発になってきたからだろう。学校が始まるとさらに感染が広がるのではないかと心配だ。

その日降り出した雪は午後には止み、翌日は強風となった。午後、ライブラリーで図書整理をすることになっていたので、風の中を歩いて向かう。そして、着いた途端、職員の方Fさんが言った。「今日の島根の感染者、百一人ですよ」。ついに第六波が来てしまったか。帰り、風はさらに増し、吹雪いた。橋の上を通る時など、車道まで飛ばされそうで、思わず欄干にしがみつく。普段、いつ召されてもいいようなことを言いながら、何だ、この生への執着は。

30代フリーター やあ、ジイさん。与党が負けることの多い米中間選挙で民主党が予想外に踏ん張った。年金生活者 背景に米中の「無血の戦争」、ウクライナでの「流血の戦争」がある。巨額の財政支出を要する戦争が政府に強いるのは「大きな政府」路線であり、それをイデオロギーとする民主党は今の事態に適応しやすい。「大きな政府」路線は世界的な流れになっており、岸田政権が掲げる「新しい資本主義」はその別名にほかならない。

この「大きな政府」路線は諸物価を押し上げ、これまで長く続いていた世界経済のデフレ基調をインフレ基調に一変させた。デフレは平和によってもたらされ、インフレは戦争が引き起こすという長谷川慶太郎の見解どおりの展開となった。平和なときは軍事的な需要が減るぶん財政支出も減って政府は小さくなる。戦争になると、軍事上の需要が膨らんで財政支出は増大し、政府は大きくなる。

30代 自民党はもともと「大きな政府」の党だという指摘がある。年金 東西冷戦がその路線を強いた。それを担ったのが、自民党の宏池会や田中角栄の派閥に代表される保守本流だった。ただし、それは変則的な「大きな政府」路線だった。軍事上の支出はおもに同盟国のアメリカに負担させ、代わりに高度経済成長をあと押しする財政支出を増大させた。それは軽武装・経済優先路線と呼ばれた。

やがて冷戦が終わりに近づく、先進国で「小さな政府」路線への転換が始まった。それは新自由主義と呼ばれたサッチャーやレーガンの政策に代表される。

日本ではこの転換は小泉純一郎の政権から始まった。彼は保守本流派閥ではない清和会に属し、以来、自民党はこの派閥が主導権を握り続けた。その流れを断つきっかけとなったのが菅義偉の退陣だった。岸田文雄に交代したことで、保守本流の宏池会が久しぶりに政権派閥に返り咲いた。安倍晋三が凶弾に倒れ、清和会の弱体化は一気に進んだ。

この時代が1万年も続いたために、その文化的な遺伝子が継承されて今に至っているという見方をしている（「統一教会騒動で家畜化する日本人」、10月15日アゴラチャンネル）。

氏族社会は国家が誕生する以前の社会であり、したがって、国家による富

それは「小さな政府」路線の終わりを意味した。維新の会が以前あれほどいがみ合っていた立憲と共闘を始めたのも、同じ意味を持つ。維新は小さな政府路線を鮮明にすることで議席を伸ばしてきたが、これから先それを続けるのは困難と踏んで、「大きな政府」路線の立憲に接近せざるを得なくなつたと推察される。

30代 「大きな政府」に対しては「バラマキ」とか「自立を妨げる」とか「企業の競争力を低下させる」といった根強い批判がある。

年金 そのわけを、少し遠回りして富の交換ということから考えてみる。たとえば、SNS上での「いいね」のやり取りは、文化人類学でいう「互酬」にあたる。互酬は贈与と返礼の連鎖から成り、商品の交換とも違うし、富の再分配とも異なる交換様式のひとつだ。それは国家が誕生する以前の氏族社会で支配的だった古いシステムだが、ウェブ世界がそれを再活性化させている。

「いいね」は英語では「ライク」だ。

前者はほめ言葉、後者は好意の伝達という違いがある。ほめ言葉を「称賛の贈与」と考えれば、好意の伝達のほうはそうした意味合いが薄い。むしろ「私にも好意を持つてほしい」という「贈与の要求」を含んでいる。サルトルの言葉を借りれば、愛とは愛されたいと望むことだからだ。

だとすると、「いいね」は「ライク」にくらべて互酬性の原理がずっと強く働いていると考えることができる。これは日本人のメンタリティーに合致する。互酬性の原理のもとでは、何かをもらったら、お返しをしないではいけない気持ちに駆られる。人に迷惑をかけること、他人に借りをつくることを嫌う日本人の特性は、その原理に由来すると考えれば理解しやすい。

30代 互酬なんて遠い昔の社会のことだろう。年金 それが支配的な交換のシステムだったのは氏族社会であり、日本では縄文時代がそれにあたる。池田信夫は

ニュース日記 855  
中村 礼治

## 再分配と互酬

の再分配はまだ行われていない。生活保護をうしろめたいことのように感じ、ときには受給者に冷たい態度を取る日本人が少なくないのは、再分配のない互酬の文化的な遺伝子が機能しているからだという推定が成り立つ。互酬の原理からみれば、生活保護は受ける側が国家から贈与を受けただけで、返礼ができない。返礼なき贈与は負い目であり、負債であり、耐えがたいものとなる。

アメリカのピューリサーチセンターの調査（2007年）によると、「国は貧しい人々の面倒を見るべきだ」という考えに同意すると答えた人は、イギリス91%、中国90%、韓国87%、アメリカ70%だったのに対し、日本は47%で、最低の59%だったという。これは日本人が薄情だということも必ずしも意味しない。そのメンタリティーの多くの部分を互酬性の原理が支配し、そのぶん国家による富の再分配を好まないことが、冷たく見える理由と思われる。